

だい かい  
第12回

# 「いつもありがとう」

## 作文コンクール入賞作品集 2018

(選者) あさのあつこ / 森田正光 / 小島奈津子 / 崎村忠士 / 別府薫



# シナネンホールディングス グループのこと知っているかな?

皆さんの身近なところで活躍しています

「いつもありがとう」作文コンクールを共催している  
シナネンホールディングスグループのこと、  
みなさんはどんな会社か知っていますか？  
実は、みなさんの住まいや暮らしのなかで役立っ  
ていたり、社会を支えたりしています。  
その製品や事業について  
紹介します。



オリジナル  
住宅用品の販売  
洗濯機用脱水トレイなど



電気



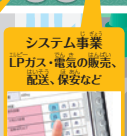
リフォーム



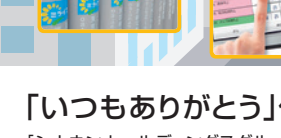
ハウスクリーニング



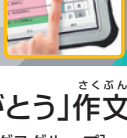
家庭用エネルギー  
LPガス・都市ガス



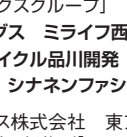
システム事業  
LPガス・電気の販売、  
配送、保安など



LPガス自動車用  
オートスタンド



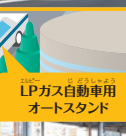
自転車



太陽光発電システム



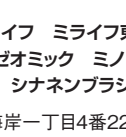
サービスステーション



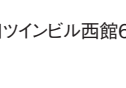
ダイシャリン 自転車



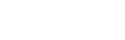
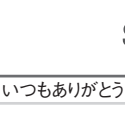
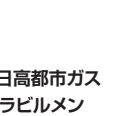
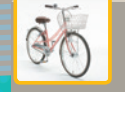
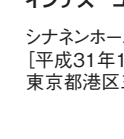
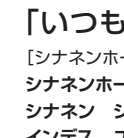
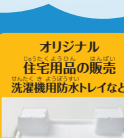
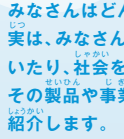
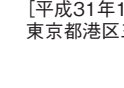
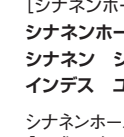
ビルメンテナンス



STORE



STORE



## 「いつもありがとう」作文コンクール共催企業

[シナネンホールディングスグループ]  
シナネンホールディングス ミライフ西日本 ミライフ ミライフ東日本 日高都市ガス  
シナネン シナネンサイクル品川開発 シナネンゼオミック ミノス タカラビルメン  
インデス ユテックス シナネンファシリティーズ シナネンブラジル

シナネンホールディングス株式会社 東京都港区海岸一丁目4番22号  
[平成31年1月21日移転 新住所]  
東京都港区三田三丁目5番27号 住友不動産三田ツインビル西館6階



いつもありがとう 作文

第12回「いつもありがとう」作文コンクール入賞作品集(2018) もくじ

先生方のお言葉……………3

あさのあつこ(作家)

森田 正光(気象予報士)

小島 奈津子(フリーアナウンサー)

崎村 忠士(シナネンホールディングス株式会社)

別府 薫(朝日小学生新聞)

最優秀賞

あんこのきずな

佐々木 高翔……………4

シナネン賞

わらい声、六倍

大隅 光一朗……………6

ミライフ賞

じゅもん

田中 聖蘭……………8

朝日小学生新聞賞

「私をわかってくれる母」

廣江 紗楽……………10

優秀賞

〈低学年の部3編〉

ぼくのおとうと

本多 叶夢……………12

おじいちゃんはおじぞうさま

村上 心都……………14

お父さんの家事せんそう ありがとう

大関 幸……………16

〈高学年の部3編〉

ひまわり

大鳥 秀高……………18

ぼくから山盛りのありがとうを

阿部 功希……………20

弟からの贈り物

相原 潤……………22

団体賞(6団体)

【北海道】 札幌市立西野第二小学校

【群馬県】 太田市立生品小学校

【愛知県】 扶桑町立柏森小学校

【愛知県】 扶桑町立扶桑東小学校

【広島県】 福山市立金江小学校

【鹿児島県】 中種子町立星原小学校

主催…朝日小学生新聞社

共催…シナネンホールディングスグループ

後援…文部科学省 朝日新聞社

●応募総数三八、〇八六作品の中から選ばれました。

先生方のお言葉

あさのあつこ 「作家」

私にとってこのコンクールの選考は楽しくて苦しい作業です。しかし、このコンクールに寄せられた作品を読むとほっとします。子どもたちを信じることができ、子どもたちの周りにいる大人たちを信じられるのです。大人たちが子どもたちを慈しみ、大事に育て、生活を豊かにしていると感じ、安心します。私自信が救われたような、励まされたような気持ちになるのです。

森田 正光 「気象予報士」

今年、職業に対して思い入れがある作品が多かったように見受けられます。美容師や自衛隊員、看護師、大工など、たくさんさんの仕事子どもたちの目を通して作文の中で語られているのを読むことができ、楽しかったです。私たち大人は、子どもたちの目を意識して働かなければいけないと、気持ちを引き締める良い機会になりました。

小島 奈津子 「フリーアナウンサー」

作品を読むと毎回新しい発見があります。私の娘が中学生になり、現在子育て真っ最中なので、どうしても母親の立場で作品を読んてしまいます。母親として子どもの応援の仕方を教えてもらった作品もありま

した。子どもは、大人をよく見ているんだなあ、と感じました。どの作品も、家庭円満な様子や家族の暖かさが目に浮かびました。

崎村 忠士 「シナネンホールディングス株式会社」

作文を読ませていただくと、鋭い感性や洞察力に毎回驚きます。感受性は学年には関係しないのですね。小さい子どもたちが、保護者の心の奥まで見通すことができるのは、家族が大好きだからではないでしょうか。好きだから相手のことを深く考えているのだからなあ、と思います。相手に興味を持って思いやる気持ちは、社会に出て役に立つ二生の宝物だと思います。

別府 薫 「朝日小学生新聞」

低学年も高学年もそれぞれに良さがありません。低学年の作品は、見たものをまっすぐにそのまま伝えるような、心を打つ文章でした。お父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんが、背中を見せているときとか、仕事をしているときの姿が実にまっすぐな目で見つめ、そのままつづっている良さがありません。高学年の作品は、自分の感情を相手に分かるように論理的にまとめる力や構成力に感心しました。

(順不同敬称略)

## あんこのきずな

佐々木 高翔

ほくのだいすきなおやつ、あんこだんご。このあんこだんごをいつもかっけてくれるひとがいる。すぐちかくにすんでいる、ほくのおじいちゃんだ。いつもほくは、じいじとよぶけれど、まえに

「ほんとうはじいちゃんてよんでほしいな。」

といっていたのを、ほくはこっそり聞いていた。だからここではじいちゃんと言ふ。

じいちゃんは、むかしはからだがおおきくてちからもつよくて、うんどうもとくいだったそうだ。ほくがあかちゃんるときも、おかあさんがごはんをつくったり、いそがしいときに、ほくをずっとだっこしてうたをうたってくれていたみたいだ。じてんしゃでさんぽにつれていってくれたこともある。でもさいきん、としをとったしびようきもして、まえよりちからがなくなってしまうた。ほくはおおきくなってきたのに、じいちゃんはちいさくなっている気がする。

だけど、こころはまだまだおおい。ほくがしっばいをしたり、かなしいきもちになつたりしたときにはいつも、やさしくしずかなこえでなぐさめてくれる。そして、ほくがだいすきなものをわかってくれていて、いつもあんこだんごをよいししてくる。それだけじゃない。ほくがだいすきなこんちゅうやきょうりゅう、むかしのできごとやがいくのこと、なんでもしっていて、なにをきいてもすぐにおしえてくれる。あたまのなかにたくさんおはなしがつまっていて、ほくよりずっとずっとすごい。

でも、ほくとかわらないところもある。それは、あんこがだいすきということだ。じいちゃんは、だんごだけでなく、もちもおはぎもだいすきだ。じいちゃんのいえにいけば、おしやうがつでもないのである。ほくがよろこんでたべたこともないあんこのおかしをたべさせてくれたりもする。ほくがよろこんでたべたから、うれしくていろいろなあんこのおかしをさがしてくる、とおかあさんはいついていた。ほくはとてもうれしかった。ほくはまだ、ひとりでかいものをしたり、おいしいあんこのおかしをみつけることはできないけど、おとなになつたらおいしいあんこのおかしをたくさんたべさせたい。だから、それまでげんきで、いろいろなおはなしをきかせてほしいな。そしていつしよにたくさんあんこをたべたいな。

ほくのだいすきなおやつ、あんこだんご。それよりももっともっただいすきなじいちゃんが、いつもそばにいてくれてうれしいよ。ありがとう。

## 評価のポイント

好物のあんこより、おじいちゃんが大好きという気持ちがいっしょと書いている。

## わらい声、六倍

大隅光一朗

ぼくのうちはいつもうるさい。大わらいしてころげ回ることは毎日だし、大声でおこれることもしょっちゅうだ。

ぼくにはお父さんお母さん、そして弟が三人いる。お母さんいがい、みんな男だ。うちはパワフル六人かぞくだ。

みんな同時にしゃべり出すから、お母さんは、

「一人ずつしゃべって！」

とよく言う。そんなお母さんの声も大きい。

弟たちとおふろに入っている声は、三百メートル先のさかの上まで聞こえているらしい。お父さんがしごとからかえってきた時に、大わらいしながらそう言っていた。

ぼくは四人兄弟の一ばん上だから、大へんだ。たとえば、しゆくだいをしていると、一さいの弟がハイハイでよつてきて、ぼくの足をなめる。とても気がちる。けんかをした時は、弟が先になき出すから、ぼくはがまんが多い。それなのに、一ばんおこられる。朝、弟をトイレにつれて行くのも、ぼくのしごとだ。ほんとうは、すごくめんどくさい。

よく、お父さんとお母さんが、

「かぞくはチームだ！」

と言う。かぞくみんなで心ばいし、みんなでかなしみ、みんなでたすけ合い、みんなでよろこび、みんなでわらう。そうやって、のりこえていくんだって。よくわからないけど、かぞくが多いのもわるくはないなって、少し思った。

兄弟が多いと、たくさん話せて、いっしょにあそべてうれしい。気に入っていたふくは、弟がきてくれるからうれしい。弟をあやすと、ケラケラわらってくれるからうれしい。やつぱりぼくは、かわいい弟がいて、うれしい。

お父さんお母さん、六人チームを作ってくれて、ありがとう。お父さん、おしごとをがんばってくれてありがとう。あせだくになつてあそんでくれるお父さんが、大すぎ。お母さん、いつもたくさんのごほんと、せんたくをありがとう。夜ねる前に、ぎゅつてしてくれるお母さんが大すぎ。弟たち、いつもわらわせてくれてありがとう。かわいくておもしろい弟たちが大すぎ。

ぼくのうちはいつもうるさい。だけど、わらい声も六倍！ こんなにぎやかなチームが、ぼくは大すぎ。



## じゅもん

田中 聖蘭

「パパ、きらい。あっちいって。」

「パパ、いやー。こっちないで。」

「なんだとー。」

と、いいながらパパはガハガハわらって、わたしをだっこして、ほっぺたにひげをじよりにあててきます。わたしは、かおがいたいし、パパのちからもつよいので、

「ぎゃー。たすけてー。」

といって、にげます。すると、こんどはひよいとわたしをくうちゅうにほうりなげて、ガシツとつかまえるのです。これがたのしくてしかたがありません。

だから、わたしはパパにあそんでほしいとき、このじゅもんをとなえます。

パパは、はやおきがとくいです。かいぎやしごとでよるどんなにおそくなっても、ぜったいにねぼうしません。さっきまで、パンツいっちょうであるいて、ママにおこられていたのに、いつのまにか、きりつときがえて、かいしゃにでかけます。わたしは、かっこいいなあとおもいながら、いつてらっしやいをします。

パパには、よなかにでんわがかかってくることもあります。たいていは、しごとのとうちやくじかんのかくにんやしじをするやくそくをしていたもので、すぐにおわります。

だけど、でんわがながいときは、なにかたいへんなことがおきたときです。メモをとったり、かんがえこんだり、ほかにでんわをかけたなり、どうじにいろんなことをすごいはやさでします。そのときのかおは、ちよっとおこっているようにみえます。でも、ほんとうにおこったときのかおはもつとこわいので、しんけんなおなんだとおもいます。たいへんなことがかいつつすると、パパはいつものパパにもどります。

ゆうごはんをたべたあと、いっしょにテレビをみているとき、ぐうぐうといびきがかこえることがあります。さっきまでおきていたのに・・・

むてきにみえるパパだけど、つかれることもあるんだなとおもいました。

おふるのじかんになると、パパはげんきにふっかつして、おにいちゃんとなつたしをりょうてにかかえておふるばまでつれていってくれます。わたしは、パパのおおきなせなかをごしごしとちからをこめてあらいます。

バスタオルでガシガシふかれているとき、ちよっぴりいたいけど、たのしいきぶんです。

そして、ねるまえにもあのじゅもんをとなえます。

「ぎゃははははは。」

わたしたちはおおわらいます。わたしはなんどもなんどもじゅもんをとなえます。

じゅもんではそういってないけれど、ほんとうは、パパのことがだいすきです。

いつもありがとう。

## 評価のポイント

お父さんの人物像が上手に書けている。働くことの大変さや尊敬する心が伝わってくる。

## 「私をわかってくれる母」

廣江 紗楽

私は、母ととても仲が良い。でも、仲が良すぎるのは、はずかしいことなのだろうか。

そんなことを考えている時に、母が北村薫の「月の砂漠をさばさばと」という本をすすめてくれた。好奇心旺盛な女の子を見守る、小説家のお母さんとの仲良し親子の、楽しくほのぼのとした日常会話が描かれた物語だ。母が結婚したころ、将来娘がほしいと思いい、もし娘が生まれたら、この本のような親子関係をつくりたいと思っていたらしい。

私も小さいころから好奇心旺盛であり、何にでも興味を持って質問をしたり、おしゃべりや絵本が大好きだった。今でも、母とは一日の出来事を話したり、一緒に過ごす時間が多い。

けれど、最近の私は、いつも母と一緒にいることが、はずかしいことなのかと、疑問に思う時がある。それは、友達と比べて自立心が少ない気がしていたり、友達のさそいよりも、母との時間を優先してしまう時があるからだ。母と一緒にいるのは、何よりも安心するけれど、そのことを友達に知られるのははずかしい。そして、はずかしいと思つて、母に気付かれたくもない。

そんな時、この本をすすめてきた母は、やはり私の心のモヤモヤに気付いていたのかもしれない。

い。母は、いつも私のちよつとした声の違いや、話し方で変化を感じ「何かあったの？」と聞いてくる。言葉にしなくても、私のことを分かってくれる。いつも全力で応援してくれる母に、見守ってもらっていると感じた瞬間、胸がキュツとした。

時に叱ってくれたり、背中を押してくれたり、相談相手になってくれるそんな母は、何より私と仲が良いことをとてもうれしく思いい、毎日の会話を楽しんでる。そして、すすめてくれた本は「親子の縦のつながりが、友達の横のつながりにより近づく」ということも教えてくれた。親といい関係を築けていたら、友達とのいい関係を築くことが得意になる。つまり、親子の縦のつながりは、生まれてから心と体の成長の基礎を作り、言葉やコミュニケーション能力を自然と学べるので、友達との横のつながりの関係性に役立つということだ。

私は、友達よりも心の成長がスローペースなのかもしれない。でも、今まで築いてきた母との関係は、これから築いていくたくさんの人との関係を良いものにしてけると信じ、これからも安心して母と一緒に過ごす。

どんな時でも、笑顔でいる母と一緒にいると、私も笑顔になり、明るく元気でいられる。母と仲が良いことは、決してはずかしいことではない。今回のことで、母への感謝がより深まった。お母さん、ありがとう。

## 評価のポイント

揺れる自分の心理を客観視し、分析し、結論まで出している完成度の高い作品。

## ぼくのおとうと

本多 叶夢

らいちゃんはようちえんに通う5さいのぼくの弟だ。たべることが大好きで、すぐに「おなかですいたー。何かたべたいよー。」とグズグズさわぎだす、くいしんぼう。

一人あそびが好きで、家ではおとなしくきょうりゅうのおもちやでたたかいごっこをしたり、ぬりえを上手にぬっている。

そんならいちゃんをぼくは、かまいたくてしかたがなく、ちょっかいをだすとらいちゃんはいやがってないてしまう。そしてぼくはまいにちのようにお母さんにしかれて、らいちゃんをにらみつける。

「おにいちゃんなのにどうしてやさしくしてあげないの。もっと弟を大切にしておきなさい。」

とお母さんに言われるけど、ぼくはおにいちゃんになりたくなかったわけじゃないし、弟がほしかったわけじゃない。一人っ子だったらお母さんもお父さんもぼくにだけやさしくしてくれるし、おもちゃもゲームもぜんぶ一人じめできるのに、とぼくはいつも思う。

らいちゃんに好きな人をきくと、

「ママが1位でぼくが2位ではあばが3位で。」

聞いていると、どんないろんな人の名前がでてきて、ぼくはあせりだす。7位くらいになつてようやくぼくの名前がでてくると、お母さんとお父さんはわらっている。けどぼくはわらえない。

「どうしてぼくはいつも7位なの。」

と聞くと、

「だっていつもいじわるするからだよ。」

といわれる。くやしいけど、そのとおりだとおもう。ぼくは、じゅん位を上げてもらうのにひっしらいちゃんのごきげんとりをはじめ。おもちゃをかしてあげたり、ほめてあげるといつきにぼくのじゅん位は2位になる。らいちゃんはとってもたんじゅんだ。だけどそこがかわいいところでもある。

らいちゃんにとってのぼくは、7位からたまに2位になって、また7位にもどるお兄ちゃんのような。ぼくは、その順位よりらいちゃんは上だけど、はずかしいからないしよにしておく。こんなきょうだいのかんけいが、ぼくたちにはちょうどいいと思う。

## おじいちゃんはおじぞうさま

村上 心都

わたしのおじいちゃんは、大工さんです。おしごとの時は「とうりょう」や「おやかた」とよばれています。

「こんな木のくずおとしているのは、おじいちゃんしかいない。」

おばあちゃんは、そう言っておこります。じゅうたんの上におちた木が、わたしたちにささらないように、おばあちゃんはすぐそうじをします。

「ヒツヒツヒツ、おこられちゃった。」

おじいちゃんは、わらいながらわたしを見ます。わたしも、つられてわらいます。

「おじいちゃんて、何ににていると思う。」

と、聞きました。少しなやんでから、

「何かなあ、おじぞうさまかな。」

と、おばあちゃんは言いました。わたしは、ああ、そうだなと思いました。おじいちゃんは、メガネをかけると「せつけい図」というものを、じっといつまでも見えています。あきないのか

など思います。にこにこして、みんなのおしゃべりを聞いています。おじいちゃんは、あんまりしゃべりません。すわっていると、本もののおじぞうさまに見えてきました。

わたしは、大工しごとでつかう、小さなはしごをかりました。のぼってみたら、三だん目で足がブルブルしました。

おじいちゃんは、大工しごとをしている時に、大きなケガをしました。何日も、ねたままうごけませんでした。だから、毎日おみまいに行きました。

おじいちゃんが、

「本当は、高いところはにがてなんだよなあ。」  
と言っていたのを、思い出しました。

おじいちゃんは、何十年も高いところでおしごとをしています。わたしといっしょで、きつと、足がブルブルしているんだと思います。でも、毎日おしごとに行きます。おじいちゃんは、つよくてやさしいおじぞうさまです。

もうすぐ、みんなですむおうちをたてます。おじいちゃんが、たててくれます。わたしも、たくさんお手つだいします。おじいちゃんがこわくないように、はしごをささえてあげたいと思います。

おじいちゃん、いつもありがとう。おじいちゃんの「ヒツヒツヒツ」のわらい声がすきだよ。あと、ザラザラしてゴツゴツの、あったかい手も大好きだよ。



## お父さんの家事せんそう ありがとう

大関 幸

家が大へんなことになる。そう思ったのは「二人とも、ここに来てすわって。」

と、お父さんとお母さんが言ったからだ。だいたいそう言われると、しかられるとか、よくないことがある時が多い。だから私はドキドキしながら、下を向いてすわった。きつとお兄ちゃんも同じ気持ちだったと思う。お母さんが話し始めた。

「あのね、お母さんは、家からいなくなりますが、でも二カ月です。仕事でけんしゅうに行くことになって、遠いからおとまりになるの。お父さんがその間、全ぶやってくれるからだいじょうぶだよ。」

と言った。私は、お母さんがいなくなるわけじゃないのに、聞いているうちになみだがこぼれてきた。大好きなお母さんとはなれるのがかなしくて、どんな生活になるのかふあんになったからだ。

そして、お父さんの家事せんそうが始まった。

「おーい。おきてくださいーい。おーい。おきてー。おーい。おきろーっ。」朝が始まる。お父さんは、私たちをおこす前に、朝ごはんを作って、私とお兄ちゃん、自分の三つのおべん当を作った。毎日毎日休むこともさぼることもなく作ってくれた。はじめのう

ちは、おかずの入れ方がゆるゆるで、あけるとおかずがあちこちにとんでいた。けれど、だんだんおかずがふえておべん当をあけるのが楽しみになった。

そして、お父さんは、私たちを学校までおこつて自分も会社に行った。お母さんがいる時はざんぎょうでいつも帰りがおそかったのに、ちゃんと夕方にはむかえに来て、買い物をしていっしょに帰って来た。

「いやあ、お母さんがいないと大へんだな。」

と言いながら、お父さんはせんたくをしてほした。やつと家事が終わると、お父さんはビールをのむ。でもそのうちにこっくりこっくりねてしまう。つかれているんだろなって心ばいになった。だから私とお兄ちゃんはずせんと皿あらいをしたり、せんたく物をたたんだりするようになった。お父さんの家事せんそうを少しでもお休みにしたくて。

二日だけお母さんが帰って来た。私もうれしかったけど、お父さんが一番うれしそうだった。お母さんといっぱいおしゃべりして、おいしそうにビールをのんでいるお父さんを見て、私もうれしくなった。

〜お父さんへ〜

お父さん 私たちを、心いっぱい、体いっぱい育ててくれてありがとう。お父さんがんばりで、私も何でもがんばらなくちゃって思ったよ。お母さんが帰って来たら、ごほうびに自分のやりたいことをやってね。私も、お父さんのように、自分をぎせいにして、人のためにつくれる人になるからね。お父さん、ありがとう。

## ひまわり

大鳥 秀高

僕は走る

まっすぐな一本道

ひたすらに 一生懸命に

僕は、毎朝、電車で小学校に通う。駅まではまっすぐな一本道で、線路沿いに二〇〇メートル。僕の家から見渡せる。庭を出ると踏切がある。なかなか開かないあかずの踏切だ。イライラ。そして踏切が上がれば、「よおい、ドン。」僕は駅まで全力で走る。

僕の父は町医者で、朝早くから診察の前に往診に出かける。母は父の診療所を手伝っていて、僕が出かける頃には、もう家にいない。

僕は、いつも祖父に見送られる。祖父は僕の家の近くに住んでいて、僕が出かける頃に来てくれる。だから、淋しくはない。

幼稚園へは、いつも祖父と手をつないで行く。祖父は走れない。それで、ゆっくり歩く。公園を通り抜けて行くのが近道で、公園でひとしきり遊んで幼稚園へ行く。幼稚園に行くのは、楽しく、大好きだ。

公園には遊具は無く、たくさんの木が生えている。中でも僕は、どんぐりの木がお気に入りだ。秋には毎日祖父と拾ったどんぐりの大きさを競争する。二人でひたすらに、一生懸命

に探す。そして、いつも僕が勝つ。「やったあ。」

その頃は、毎日勝つことが不思議だとは思えず、ただ無邪気に喜んでいた。今にして思えば、祖父は僕を勝たせようと、自分はずごと小さいどんぐりを拾い、僕に大きいどんぐりを拾わせていたのだろうか。

僕は小学校へ上がる。祖父は僕の支度ができるのを、庭で水やりをしながら待っている。そして、僕が走っていくのを姿が見えなくなるまで見送る。「走るの早うなったなあ。」

夏になると、踏切が開くまで毎朝、庭のひまわりの前に立たせ、背比べをさせる。「大きくなったなあ。」僕が大きくなったのを感じているのか、ひまわりが大きくなったのを感じているのか。僕は首をかしげる。「おじいちゃんひまわりが一番好きや。夏の暑い時に、他の花がへばっているのに、太陽に向かって、まっすぐ、ひたすらに、一生懸命に伸びている。そして、黄色い太陽みたいに輝く花を咲かせる。そんな人にならなああかん。」

祖父がこの庭に来れなくなつて、一年が経つ。祖父はもういない。夏になり、ガラガラと太陽が照りつける朝、ひまわりは咲く。まるで僕にほほえみかけるように。いつも見守ってくれた祖父の温かいまなざしと深い愛、当たり前だった幸せな朝がよみがえってくる。

「いつもありがとう。」

言えなかった言葉。胸にかかえて、

僕は走る。

まっすぐな一本道

ひたすらに 一生懸命に

僕は走る。

## ぼくから山盛りのありがとうを

阿部 功希

のどがつまって言葉が一つも出てこない。今こそ、たくさんありがとうを伝えなくちゃいけないのに。

ろうかが氷のように冷え冷えだった昨年の十二月、朝早くに電話が鳴った。岩手に住んでいる曾祖母、ハナさんが天国へ旅立ったという悲しい知らせだった。遠く離れた群馬に住んでいるぼくたちは、毎年夏休みに会いに行くのをとても楽しみにしていた。

「遠いところ来てくれてありがとう。」

山盛りの、塩がきいた大きなまん丸のおいしいおにぎりをつけものを用意して待っていてくれた。目の前の緑色の田んぼがさわさわとゆれるのを見ながら、おにぎりを食べて、学校のことや友達のこと、色々と話した。そして必ず言われる大切なこと、

「どんな時でも、あいさつと感謝を忘れないこと。相手とけんかしていても、ありがとうは相手を見てきちんと言うこと。大切だから大人になっても忘れないでね。」

毎年くり返しくり返し言われた。ハナさんは、ありがとうもおにぎりも山盛りだった。会いに来てくれてありがとう、学校のこともたくさん教えてくれてありがとう、おいしそうに食べてくれてありがとう、お花くれてありがとう。にっこり笑顔のハナさんが言ってくれるあり

がとうは、岩手のなまりでとうの音が下がる。それがぼくにはとてもやわらかく聞こえた。

新幹線から降りると、岩手は雪がたくさんつもっていた。ハナさんの家に着くと、いつものにっこりの笑顔も、山盛りのおにぎりをつけものもなくて、みんなの涙もカチカチに凍りそうなほどにさむかった。

お別れの時、泣かないで見送ろう、今こそ山盛りのありがとうをハナさんの顔を見てきちんと言おうと思った。おいしいおにぎりをつけものを作ってくれたこと、笑顔で話を聞いてくれたこと、離れていてもいつも応援してくれたこと。ぼくは花を入れながら言おうとした。でも、のどがつまって言葉が一つも出てこない。ぼくのありがとうの山盛りが一気に押しよせてきて、のどの所で混んでいる。何か言おうとして口を開いてもぎゅーという、変な音が出てくるだけだった。祖父や母は、

「だいじようぶ、伝わっていると思うよ。」

と言ってくれたけど、ぼくの山盛りのありがとうは、ちゃんとした音になってのどから出てきてくれなかった。

だからぼくは思った。今後、ぼくは色々な場面で感謝の気持ちをきちんと伝えたい。小さな事でも心をこめて。音にならなくても、伝えることもあるけれど、ハナさんがいっぱい言ってくれたありがとうは、ぼくの記憶の中で思い出すたびふんわりとひびく。だから、ぼくもハナさんのようにたくさんの人たちに向けて山盛りのありがとうを伝えて行こうと思う。

## 弟からの贈り物

相原 潤

ぼくの名前は相原潤。またの名は、潤ちゃん。またの名は、相ちゃん。他にもいくつかある。お父さん、お母さん、友達、みんながいろんな場面いろんな名前前で僕のことを呼ぶ。ぼくは自分の名前が大好きだ。その中でも特にお気に入りのお名前がある。

ぼくには、四才年下の弟がいる。弟は、ぼくより早起き。毎朝、ぼくのことを起こしてくれる。ぼくは眠くて、なかなか目も開けられないのに、早起きして朝早くから元気な弟はとてもえらいと感心する。朝早くから、次々手伝いをしてる弟は一体何者なんだろうとおどろくこともある。朝から忙しそうに走り回る弟を見て、なんだかぼくの方が朝から少し疲れることもある。

毎日、ぼくが朝ごはんを食べた後、

「はい、潤ちゃん、今日の。」

と着替えを持ってきてくれる。弟は、ぼくが着る服をその日の気分に合わせて選んでくれる。ぼくに似合う服を選んでくれてるようだ。取りに行く手間も省けて楽ちんだ。それになかなか組み合わせが上手い。でも時々、選んでくれた服を着ておどろくことがある。赤いティーシャツに黄色いズボン。元氣いっぱいの組み合わせだ。お母さんが、

「潤ちゃんのランドセルが緑色だから信号機の出来上がりだね。」

と笑って言う。ぼくもすごく楽しくなる。弟は恥ずかしそうに笑う。学校で自分の服を見る度に弟の恥ずかしそうな笑顔を思い出す。

時々学校で弟に会うことがある。家で見ている弟とちがつて少し大人っぽい。学校で出会った時には、

「よお、にいちゃん。」

と呼んでくる。初めてそう呼ばれたときはおどろいた。でもぼくは、こんな風に時々「にいちゃん」と呼ばれるのがうれしい。これがぼくの特にお気に入りのお名前だからだ。ぼくにいちちゃんという名前をくれたのは弟だ。ぼくにこの名前ができたのは、弟が生まれてきてくれたから。この名前の時にはぼくはいつもよりがんばれる。弟がもつと小さいころ病気をして病院に行っている間、おじいちゃんがぼくの手を握って一緒にいてくれた。

「潤ちゃんは、にいちゃんだね。」

と言ってくれた。初めて留守番する時、お母さんは、弟に

「直ちゃん、にいちゃんの言うこと聞くんよ。」

と言った。留守番の間、少しさみしかったのか、いつもより弟はぼくの近くにいた。だからぼくは、いつもより弟に優しくした。

ぼくの潤という名前はおばあちゃんがつけてくれたたった一つの宝物。ぼくとぼくの周りの人たちの心がいつでも潤い優しくいられるように願いが込められている。にいちゃんという名前は弟がぼくに贈ってくれた。いつものぼくより、少し勇気がわく名前。ぼくと弟のふたりの宝物。すてきな名前ありがとう。